

# 時代を読み解く

シリーズ 35

航空機の将来性看目  
軍事利用の検討開始

最近のウクライナ戦争や中東での紛争において、ドローンが華々しく戦場に登場している。筆者にとって、これは100年前の第1次

世界大戦を彷彿とさせる。ここでは、航空機、戦車、潜水艦といった当時の最新技術を用いた兵器が登場した。そして航空機は、大戦後の世界において戦争の様

機が登場した20世紀初頭より、その将来性に目を付け、軍事利用の検討を開始した。その際、長大な国土を有し、木造家屋が多い我が国にとって、航空機による国土防衛は国情に合った方法だと考えられた。他方、第1次世界大戦を組織的に調査研究した結果から、戦時には航空機とそ

会的地位も低く、「車夫」扱いされていた、志願者の募集に苦勞した。何より、社会における航空分野への理解が低く、陸軍内部でも少数の専門家を除き、その本格的な軍事利用には否定的であった。航空兵科の独立確保各種施策で制度確立このような状況に対し、

校の進級速度を良好にすると共に、上位階級者のポストを確保した。これは航空兵科の独立につながり、航空兵の士気・人気向上に貢献した。さらに航空部隊の拡大に伴い、各種専門学校を設立し、運用思想の研究も開始した。大正は軍縮の時代でもあったが、陸軍は予算獲得のため、航空機の将来性の宣

## 大正時代のゲームチェンジャー？

### 航空機の登場と帝国陸軍の対応

相を大きく変えるような、とも分かっていった。そのため、大量の航空器材の製造となる兵器であることみなされるようになった。

しかし、航空機のみならず、新技術の軍事的活用はその将来性が不透明な場合が多く、安定したものにするためには、さまざまな課題を克服しなければならぬのが実態である。

また、航空機の操縦には危

また、大戦を利用して、航空先進国からの技術獲得に努めると共に、航空器材の

今月の講師

松原 治吉郎氏

防衛研究所

戦史研究センター史料室 主任研究官



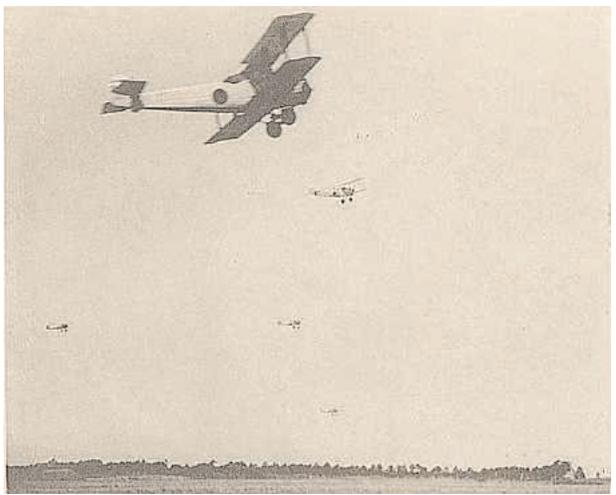
1976(昭和51)年生まれ、富山県出身。東京大学経済学部卒業、2000年防衛庁(当時)入庁。06年に米タフツ大学フレッチャースクール法律外交大学院修了、21年に政策研究大学院大学国際問題・安全保障プログラム専修了。博士(国際関係論)。23年より防衛研究所勤務。専門は日本近現代軍事史。最近の主な業績として、単著『陸軍航空の形成—軍事組織と新技術の受容』(錦正社、23年)＝2024年度国際安全保障学会「最優秀出版奨励賞(佐伯喜一賞)」受賞(24年11月)＝などがある。

また、航空兵は、裾野が

また、大戦を利用し、航

また、科学技術と社会

また、科学技術と社会



①編隊飛行する帝国陸軍航空部隊の「乙式一型偵察機」  
②観戦する将官たち(写真はいずれも1925(大正14)年8月5日、埼玉県在所沢飛行場)＝『大正十四年八月五日航空兵科創設祝典記念写真帖』＝防衛研究所所蔵



テーマをさらに深掘り

「防研セミナーブリーフィング」

執筆者の松原主任研究官が今回のテーマをさらに深掘りして解説し、防衛省職員と突っ込んだ議論を行う「防研セミナーブリーフィング」が12月23日(月)午後3時～4時まで、市ヶ谷のF1棟6階「国際会議場」で開かれます。参加者・聴講者は隊員に限定します。ご興味ある方は奮ってご参加ください。▽問い合わせ＝防研企画調整課03-3268-3111(内線29177)まで。